

正倉院年報

一、古裂の整理

昭和四十三年度においては、もっぱら南倉所属の楽服類と南倉第二百二十六号櫃所納の幡類残闕の展開整理を行なつた。その品目は次のとおりである。

一、楽服類

唐古楽十九物の内

横笛布衫

一領 白布

墨書 東寺唐中樂横笛衫 天平勝宝四年四月九日

右横笛布衫は御物目録には唐古楽十九物中に列するも、銘記より推して唐中樂に属すべきものである。

横笛布衫

一領 白布

墨書 東寺唐古樂横笛衫 天平勝宝四年四月九日

又云 豐足□得二人具 四物

三鼓打布衫

一領 白布

墨書 東寺唐古三鼓打衫 天平勝宝四年四月九日

蘇芳皮兒布衫

二領 並白布、貫頭形

一領 墨書 東寺蘇芳皮兒衫 天平勝宝四年四月九日

又云 三井、六、

一領 墨書 東寺蘇芳皮兒衫 天平勝宝四年四月九日
唐散樂九物の内

鼓打布衫

一領 白布、兩袖欠

墨書 東寺唐散樂布衫鼓打 天平勝宝四年四月九日

狛樂十七物の内

白盤布衫

一領 白布

墨書 東寺狛樂白盤布衫 天平勝宝四年四月九日

駒形布衫

一領 白布

墨書 東寺狛樂駒形布衫 天平勝宝四年四月九日

駒形從布衫

一領 白布、貫頭形

墨書 東寺狛樂駒形從布衫 天平勝宝四年四月九日

師子布衫

一領 白布

墨書 東寺狛樂師子布衫 天平勝宝四年四月九日

小鼓打布衫

一領 白布

墨書 東寺狛樂小鼓打衫 天平勝宝四年四月九日、魚人

曾万里布衫

一領 白布

墨書 東寺狛樂曾万里□衫 天平勝宝四年四月九日

橡絶裏残片 一片 附白絶綿入二片

墨書 東寺狛 一

右三片は御物目録に面袋一口となす。展開整理の結果三片に分かれ
橡絶一片は裏の残闕であつて、他の白絶綿入二片は何の残片か明らかでない。

黄絶裏 一条 単、二幅

墨書 東寺狛楽 振鼓二人 師子二人 弄人二人 天平勝宝四年四月九日

袍三十一領の内

橡地纈葛絶袍 一領 残闕、白絶裏、綿入

葛纈絶墨書 一 加美里 占部真人 調絶老匹 長六丈 十月

緋地葛纈絶袍 一領 残闕、緑絶裏

黄綾袍 一領 残闕、緑絶裏

墨書 倉人鯨、本寺別春物

黄綾袍 一領 残闕、緑絶裏

墨書 東大寺太歌袍 天平勝宝四年四月九日

紫絶袍残闕 一領 緑絶裏

墨書 東大寺綱封 東大寺

紫綾袍残闕 緋絶裏、白地錦端袖

墨書 東大寺

紫綾袍 一領 残闕、單

紫絶袍 一領 残闕、白絶裏

白布袍 一領

墨書 大伴豊足、下野^(東カ)□□、散位

黄布袍 一領

墨書 忌部川諸、服犬養

紅夾纈布袍 一領

墨書 路廣成

紅夾纈布袍 一領

墨書 大井万呂淨衣

白布袍 一領 左袖欠

墨書 稻置山守

白布袍残闕 一領 両袖及両袵欠

背に丹にて^(淨衣)と印す。

紅夾纈布袍 一領

布袍袖 三隻 紅布二、黄布一、

一、幡 類

錦道場幡残闕 七旒

羅道場幡残闕 十五旒 又一片

右いづれも聖武天皇一周忌御齋道場幡であつて、これら道場幡は幡身を四坪に区画するを普通とするが、錦幡中の一旒は五坪であるのは珍らしい。また羅幡中の一旒には「浄原王」、一旒には「日佐嶋主」

の墨書ある紙片が縫込まれてある。

道場幡脚端飾 百二十一枚 又十一片

錦の鎧形裁文を二枚合せ幡の脚端にとりつけて鎮としたもの、唐花、亀甲、双鳥連珠、鹿形、獅子、走羊、蝶鳥、長斑等各種の錦文が見られる。

夾纈羅幡残闕 三旒 又残片

頭と脚部を逸するが道場幡よりやや大きく心に纈二枚を入れ紫綾で縁取る。

大幡垂脚残片 四片

聖武天皇御一周忌齋会に用いられた灌頂幡の垂脚で、綾地裂に花形裁文の綾を貼付したものである。

錦綾纈及紐帶等断片 五点

花鳥文夾纈纈断片 六片 夾纈纈縁

十二稜花文夾纈纈垂飾断片 二十七片 紫目交纈纈纈縁
付錦垂端飾一枚

纈 一枚 四幅

墨書 戸主榎本連真坂調椽絶壹匹 長六丈 天平勝宝八歳十月

主当郡司擬少領少初位上榎本連千嶋
主当国司椽正六位上安宿戸造人足

この調絶銘記は国郡名を逸するが、郡司榎本連千嶋は続日本紀によれば、称徳天皇天平神護元年十月紀伊行幸に際し、前名草那少領榎本連千嶋が稻二万束を献じた記事が見える。この椽絶は紀伊国名草郡榎本真坂の調絶であることが知られる。

紫纈緑絶合縫 一枚 三幅

雑色組帶断片 三十一条 又二片

古裂帖 一冊 第七一五号

葛纈纈残片百六十四片雜貼七枚を貼して一冊とした。

右錦綾纈及紐帶等断片以下は幡類残闕中に混在したものである。

二、宝物の修理

本年度において宝物の修理を了えたものは次のとおりである。

(1) 漆工品修理

一、漆皮箱 一合 (中倉)

被盖造、盖身とも面を取り内外に荒い布を貼り黒漆を塗る。もと雜帶残闕を納めた箱である。

一、金銀絵漆皮箱 第三号 一合 (同)

被盖造、盖身とも僅かに面を取り、周縁には四条の麻緒をめぐらしいわゆる「ひも」としている。金銀泥で、盖表には複合大唐花文、盖と身の側面には花卉飛鳥文を描き全面に油を塗る。なお箱内には白綾の襯がある。

一、漆箱 一合 第三十七号 (同)

杉材黒漆塗、長方形で盖は面取り、前面に鉄鑢子、後側二所に銅製黒漆塗の蝶番鉸具を取付ける。

一、漆箱 一合 第四十号 (同)

木製、外面に布を貼り黒漆を塗る。蓋内面四隅に舌状の木片を付し合口のすべり止としてある。

一、密陀絵盆

十枚

(南倉)

密陀絵盆十七枚中の第一、三、四、五、六、七、八、九、十五、十七号の十枚。材は楓、背面は布を貼り表背とも漆を塗る。表面はさらに白色顔料を地塗して黄土でそれぞれ山水・人物・鳥獸・花卉などの図様を描き、背面は黒漆の上に白色顔料で宝相華文を描く。これらの図文はいわゆる密陀絵と称する技法によるもので、紫外線照射により類別すると、表面は皆全面に油を塗布した手法であるが、背面は文様の上から全体に油を塗るもの(一、三、四、六、七、十五号)顔料に油を混せて文様を描いたもの(八、九号)また前二者中後者に属しさらにその上に油をかけたもの(五、十七号)の三様の手法が認められる。

一、漆彩絵花形皿 第二号 一枚

(南倉)

一、漆花形皿 第二十一号 一枚

(同)

一、赤漆 横 一合

(同)

(四) 馬鞍の修理

一、馬 鞍 第八号 一具

(中倉)

鞍橋、鞍褥、韉、屢脊、鐙、銜は具備するが三懸と手綱は逸している。鞍橋の両輪は牟久素木、四枚居木は赤漆の桎を用いるが、居木先のみ黒漆を塗る。鞍は麻布を心に紫皮を巻紵とし角製の遊管をつ

けている。鞍褥は表は赤地錦、裏に緋綾を張り、心は麻布を重ね白絶で裏む。韉は黒漆塗の皺革で、これに町形をきめこみ、裏は溜塗の漆革を用いる。屢脊は表裏とも白絶、表の脊と縁は草花鳥獸文を白く抜き出した広幅の黒革で飾る。韉と屢脊の心はいずれも荒い布、闌筵、解葉を重ねて麻布で裏んである。鐙は鉄製黒漆塗の壺鐙、銜具は金銅製である。銜は葵葵銜で面懸付を鎖とし黒漆を塗る。麻布の腹帯を付す。

以上いずれも原状を損わない程度の維持修理を行った。

三、刀剣類の研磨

第二次刀剣類研磨計画第二年度として本年度において研磨を了したものの次のとおりである。

一、銅漆作大刀 第十号 一口

一口

(中倉)

一、無 莊 刀 第三十四号 一口

一口

(同)

一、鉾 第十号 一枚

一枚

(同)

一、刀子 十合鞘刀子中刃本鑽のもの 一口

一口

(北倉)

一、樺纏把鞘白銀玉虫莊刀子 第四号 一雙

一雙

(中倉)

一、棗把鞘四合刀子 第二十八号 四口の内 一口

一口

(同)

一、白牙撥鏤把鞘金銅莊刀子 第四十二号 一口

一口

(同)

四、経巻の修理

聖語藏経巻の修理は前年に引続き乙写経五十八巻を完了した。すなわち次のとおりである。

乙種写経 阿毘達磨大毘婆沙論 百五十一巻の内 五十八巻
第五〇号

卷一一三、一一七、一一八、一二二、一二三、一二四、一二五、一二

七、一二八、一二九、一三〇、一三一、一三三、一三五、一三六、

一三八、一三九_甲、一三九_乙、一三九(実一四九)一四〇、一四一、一四

二、一四五、一五〇、一六一、一六二、一六三、一六五、一六六、

一六七、一六八、一六九、一七〇、一七二、一七四、一七五、一七

六、一七七、一七九、一八〇、一八一、一八二、一八三、一八五、

一八六、一八七、一八八、一八九、一九〇、一九一、一九二、一九

三、一九四、一九五、一九六、一九七、一九八、二〇〇

右経巻はおおむね鎌倉時代の書写にかかり、巻中に東大寺正蔵、宝塔、梵字等の黒印を捺しているものがある。また建久年間主税允中原行盛の願経、嘉禄文永年間における東大寺僧宗性の識語ある経巻が含まれている。いずれも虫喰多く標紙また欠損あるいは逸失したものがあり、それぞれ旧態を損せないよう修補した。

巻末に識語あるもの二、三を次に掲げる。

(卷一二七) 建久二年二月十日書写了 為興隆仏法奉写一切経内也

願主主税允中原行盛

(卷一八七) 嘉禄三年三月十八日^{時午}於東大寺中院一見了 大法師宗性
(卷一八二) 安貞二年五月廿一二兩日之間引合念仏堂院主房婆沙論見
当巻之訳交了後覽之輩可哀其志矣 大法師宗性

五、宝物の特別調査

(イ) 刀身調査

昭和四十一年度から三年の予定ではじめられた刀身調査は本年度を以て終了した。本年度においては献物帳所載の御刀子四点と中倉納物の刀子四十一一点(自第八号至第四十八号)および黄楊木把鞘刀子一点の調査を行ない、これにて宝庫所納の刀身類の調査は全部完了した。また研磨のため本年出蔵中の大刀二口、鉾一枚、刀子四点(五口)については金属顕微鏡による金属組織や熱処理状況の科学的調査を行つた。調査は文化財保護審議会専門委員文学博士本間順治、東京国立博物館工芸課長文学博士佐藤貫一の両氏、科学的調査は岩崎重義氏にそれぞれ依頼して実施した。

(ロ) 漆工品調査

院蔵の漆工品はその数五百八十余点に達する。このうち漆皮箱を中心とする調査は去る昭和二十八年から三十年の三回にわたつて行ない、またその後大刀調査の一環として漆鞘の調査を行なつたが、なお未調査の漆工品が約五百点ある。その中で約二百点を選び本年度から調査を行なうこととした。本年度においては平脱の加飾ある漆工品を主とし、その

他螺鈿漆箱と密陀絵盆数点を調査した。その品目は次のとおりである。

一、銀平脱合子 納基子	四合	(北倉)
一、金銀平文琴	一張	(同)
一、漆 胡 瓶	一口	(同)
一、漆背金銀平脱鏡 第六号	一面	(同)
一、銀平脱梳箱	一合	(同)
一、螺 鈿 箱 納玉帶	一合	(中倉)
一、銀平脱箱中蓋	一隻	(同)
一、銀平脱箱 第五号鏡箱	一合	(南倉)
一、銀平脱八角鏡箱	一合	(同)
一、銀平脱鏡箱 外円形内八角	一合	(同)
一、密陀絵盆 第三、五、八、一七号	四枚	(同)

調査は東京芸術大学名誉教授松田権六、文化財審議会専門委員溝口三郎、東京国立博物館学芸部長岡田譲、漆芸家北村久造の四氏に依頼して行ない、東京国立博物館漆工室長荒川浩和氏がこれを補助した。

(ハ) 組帯調査

正倉院の組帯類には絹綬帯、諸種の雑色篠帯のほか刀子の組係、袈裟の組紐、楽器の飾紐、鞍の三懸、幡身の伏組や懸紐等があつて、その種類はまことに豊富である。中には唐組、新羅組と称するものもあるといわれる。本年これら組帯の調査を組紐の実技者道明新兵衛氏に依頼して行なつた。